

防虫の通帳

共働きをしていた私に代わって、息子を育ててくれたのは義母であった。

満一歳で離乳した息子はますますおばあちゃん子となり、親戚や旅行に泊まりがけで行くにも息子連れて行き、学校行事も私に代わって出席してくれた。

嫉も厳しく、いたずら盛りでも、してはいけないこと、触ってはいけない大切な物は、「これはおばあちゃんの大事な物」と教え込んであるから、息子は、「これはおばあちゃんの大事」と、私たちにもその引き出しだけは触らせなかった。

やがて息子も中学生にもなると、年老いた義母の世話をよくし、私たちがさえ気づかないようなことでもよく気がついて、「おばあちゃん、菓飲んだの」とか、お風呂が少し長ければ浴室のそばで様子を窺い、「おばあちゃん、長湯はいけないよ」と、優しく声をかけていた。

息子の高校入学が決まったとき、義母は、みんなの前で大事な引き出しを開いた。紫色の袋を取り出したとき、樟脳しょうのうの香りが部屋いっぱいに漂った。その袋を開き、

「これはおばあちゃんからの入学祝いだよ」と、貯金通帳と印鑑を取り出したとき、樟脳の香りは益々強く広がった。息子が押し頂き義母の促しで通帳を開くと、通帳へ最初の入金しんぎんは昭和三十二年一月七

日、息子の誕生の日である。それから十五年間、孫の成長を願いながら、小遣いも使わず、爪に火を点す思いでこつこつ蓄えたのだろう。

息子は通帳に顔を埋め拝むようにして、

「おばあちゃん、ありがとう。通帳に悪い虫がつかないように、この香りで守ってくれたんだね」と、泣き顔に笑みを浮かべながら言った。

